洋画家・角井厚吉と《早川　秋の夕べ》について

玉 井 貴 子 ・ 小 林 夢 実

はじめに

會津八一記念博物館には、角井厚吉によって描かれた《早川　秋の夕べ》（**図１**）と題された油彩作品がある。本作については、寄贈の経緯や制作年が不詳であり、作者の角井厚吉についても来歴など多くが不明であった。本作は油彩で緻密に描き込まれた風景画であり、その描写方法は初期の洋画作品に見られる特徴を有していると考えられた。初期洋画との関連も想定しつつ、本作の詳細を解明するために、この度、作品調査を行った。調査の結果判明した事柄の多くは作者角井についてであったが、今後の研究につながる可能性を期待し、ここに結果を報告する。尚、本稿の前半（１）は小林夢実が、後半（２）は玉井貴子が担当して執筆した。

１　角井厚吉について

現在まで、洋画家・角井厚吉について生没年を含め、詳細な来歴に言及した研究はなされていない。今回、角井厚吉という人物の来歴を追うべく、明治後半、洋画を学ぶ機関として主流であった不同舎や京都府画学校、東京美術学校などの資料を調査した。生没年については手がかりとなる資料が見つからなかったが、画家としての実績を

図１　角井厚吉《早川　秋の夕べ》　制作年不詳　油彩・キャンヴァス　49.9×70.8㎝　早稲田大学會津八一記念博物館

いかに積んでいったのか、出身校での活動内容などから推察する。

画業の出発点となったのは京都府画学校[註1]であると考えられる。『京都市立美術工藝學校一覧』に記された卒業生一覧によると、1888（明治21）年２月に角井は京都府画学校の西宗畫科を卒業していたことが分かる[註2]。当時の京都府画学校は入学の条件が14歳以上と定められていたが[註3]、角井が何歳で学校に入学し、何年通っていたのかは判然としない。角井が学校に通っていた時期、指導に当たっていたのはおそらく田村宗立（1846-1918）ら洋画家であった[註4]。ただ、当時、京都府画学校は日本初の公立美術学校として設立されたものの、充分な体制が整っておらず[註5]、生徒のなかには学校および京都を離れる者もいたようである[註6]。

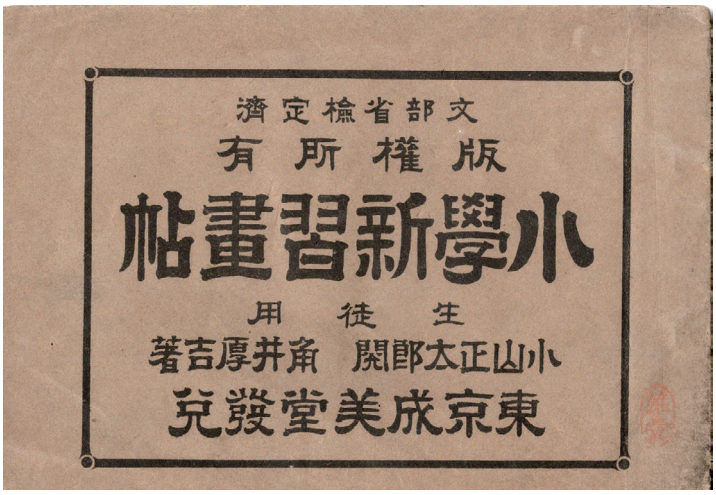

図２　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』（東京成美堂、1892年）の表紙

金子一夫氏の『近代日本美術教育の研究―明治時代―』によると、角井は京都府画学校を卒業したのち、すぐに和歌山県の和歌山中学の図画教員として赴任した[註7]。しかし図画教員として勤めた期間は３年ほどと、短い間であった。その後、角井は1890（明治23）年末から1891年の初め頃に上京し[註8]、当時、洋画を学ぶ画塾として主流であった不同舎へ通い始めた[註9]。洋画家・小山正太郎（1857-1916）が開いた不同舎は、青木繁（1882-1911）や坂本繁二郎（1882-1969）、中村不折（1866-1943）ら明治後半の洋画壇を牽引した名だたる洋画家を輩出したことで知られる。不同舎内での活動のほか、角井は1892（明治25）年に開催された第４回明治美術会に《杜鵑自由自在ニ聞ク》という題の油彩作品を出品した記録がある。美術展への出品のみならず、同年、小学校の美術教科書として『小學新習畫帖：生徒用』（**図２**）を、小山正太郎監修のもと刊行した[註10]。画家としての活動のほか、美術教育の方面でも活動をしていた。

1894（明治27）年には次章で触れる舩津静作（1858-1929）の両親、船戸徳助とちゃうの肖像画を角井は手掛けていた[註11]。しかし、これ以後しばらくは画家としての活動をどこで、どのように続けていたのかは不明であり、管見の限り作品も残っていない。不同舎を卒業した時期についても不明ではあるが、不同舎の卒業生が小山正太郎を追悼して回想文を寄稿し、1934（昭和9）年に刊行した『小山正太郎先生』の寺松國太郎の著述によると、1901（明治34）から1902年には不同舎の会計幹事を務めていた[註12]。また、本書には後輩に当たる画家から慕われていたような記述もあることから[註13]、角井は画家としての実力を認められ、一定の評価を得ていたのではないかと考えられる。ただし、後述するように『小山正太郎先生』が刊行された1934年には存命中であったと考えられるものの、本書に角井本人は寄稿をしていなかった。

肖像画の制作から20年ほど経つと、次章で詳述する通り舩津静作の依頼により、角井は1913（大正２）年から7年をかけて57枚におよぶ桜の水彩画「江北桜譜」を完成させた[註14]。また、舩津の依頼により、アメリカ人の農学者・植物学者ウォルター・テニソン・スウィングルのために「江北桜譜」と同種の水彩画11枚を1921（大正10）年に制作している（**図３・４**）[註15]。「江北桜譜」制作後、角井が画家としての活動を行なっていたのか、またどのような生活を送っていたのかは不明である。しかし、小杉放庵記念美術館の年譜によると[註16]、1939（昭和14）年に不同舎時代の後輩の小杉放庵が作品２点を出品した「石田芳美堂主催新作画展」を訪れていたようである。この記録から少なくとも1939（昭和14）年まで角井は存命であり、画壇との交流も絶えてはいなかったと考えられる。

図３　角井厚吉《白雪》 1921年　水彩・紙　34.0×29.0㎝　米国議会図書館（図版出典：https://www.loc.gov/item/2015651401/.）

図４　角井厚吉《御車返》 1921年　水彩・紙　34.0×29.0㎝　米国議会図書館（図版出典：https://www.loc.gov/item/2015651403/.）

２－１　《早川　秋の夕べ》について

続いて、これまでに確認できた角井厚吉の作品を紹介する。ここでは、まず會津八一記念博物館所蔵の《早川　秋の夕べ》を取り上げる。本作の基本情報を述べると、技法・材質は油彩・キャンヴァスで、サイズは縦49.9㎝、横70.8㎝である。制作年は不詳。画面の左下には「東都　角井厚吉　画」と書き入れある（**図５**）。「東都」は東京を意味し、従って本作は東京にいる角井が描いたということを示しており、京都府画学校卒業後、和歌山中学での勤務を経て、東京に移ってからの時期に描かれたと推測される。角井が東京の不同舎に入門したのは、前章で述べた通り1890（明治23）年末から1891年初め頃と考えられるので[註17]、画面の書き入れから本作の制作年は1890年以降であったと推測することができる。本稿の最初に述べたように、本作がいつ、だれによって早稲田大学に寄贈されたのかは分かっていない。

次に画面に描かれた内容を確認する。本作のタイトルは《早川　秋の夕べ》となっているが、「早川」とある通り、画面の左側には川が流れている。川には簡易な橋が架かり、川の右側には大きな石が転がる川原が、その奥の中景には黄色に色づいた稲穂の田が広がっている。川原と稲田の境目を３人の女性が大きな荷物を背負って歩いており、農作業後、家路に急いでいるかのように見受けられる。後景には急峻な山が画面の左右に連なり、所々、木々が赤や黄色に色づいている。黄色い稲田と木々の紅葉の様子から、タイトルの通り、描かれた季節は秋であると理解される。さらに、後景の山々を見ていくと、画面の中央には白く雪をかぶった山が見えるが、その特徴的な山容から富士山であると想定される。また、富士山と思しき山の右側には、天辺が丸く盛り上がった特徴的な形の山がふたつ連なっている。

以上のように画面を確認してみたが、秋の稲田の情景が克明に描かれた本作は実際にある風景を描いているのだ

図５　《早川　秋の夕べ》（図1）の部分拡大写真

ろうか。富士山の右横の丸く盛り上がったふたつの山は個性的な形で、実景に基づいているように想像された。また、タイトルにある「早川」も実在する川の名前か、または地名を指すように思われた。そこで、個性的な山容のふたつの山と「早川」という名称を手掛かりに、描かれた場所を探索することにした。加えて、夕刻の情景であることに鑑み、夕空と山の陰り方から富士山を東から眺めることができる場所である点も考慮した。その結果、ふたつの山と川がある場所として小田原にある二子山と早川が候補として浮かび上がり、現地を調査することにした。

図６および**７**は現在の二子山と早川が一緒に見える場所から撮影した写真である。この場所は、小田原駅から箱根登山鉄道で3駅目の入生田駅を出て徒歩３分ほどのところで、一帯は開発がなされており、川のすぐ側には堤防が高く築かれている。そのため現在は、絵に描かれたような川原が大きく広がる風景ではなくなっている。川原や稲田であった場所は堤防によって川から切り離され、神奈川県立生命の星・地球博物館や住宅街、小田原箱根道路のバイパス

図６　早川の川原より眺めた二子山（10月某日午後２時ごろ撮影）

図７　早川の側の堤防より眺めた二子山（10月某日午後２時ごろ撮影）

が立地するところとなっている。さらに《早川　秋の夕べ》では川の左側にも稲田が見えるが、現在では山際に沿って川は流れている。

以上のような相違はあるとはいえ、写真に写した早川と二子山およびその周囲の箱根の山々が形作る風景は、《早川　秋の夕べ》のものとほぼ一致しているということができる。角井が学んだ不同舎では度々、写生旅行に行っていたことが分かっている[註18]。本作が不同舎時代に描かれたものかは判断しかねるものの、川や山々は当時の姿が描写されていると考えられ、不同舎での経験が生かされた、実景に基づいた作品であるということができる。実際、本作が描かれたと推測される時期には、東海道鉄道が1887（明治20）年に横浜から国府津まで[註19]、翌年には国府津―小田原、小田原―湯本まで小田原馬車鉄道が開通し[註20]、箱根や小田原は観光地として注目の場所となっていた[註21]。早川の周辺は東京からは比較的訪れやすい場所であったと考えられ、写生旅行の成果がまとめられたのが本作なのではないだろうか。

とはいうものの、現地を訪れて確認したことであるが、《早川　秋の夕べ》に描かれた富士山と思しき山は写真を撮影した場所からは見ることができなかった。撮影した場所を地図上で確認すると、富士山はもっと右に位置している。さらに地元の方にも確認したところ、箱根の急峻な山々に遮られ、撮影場所からは富士山を見ることができないとのことであった[註22]。従って、《早川　秋の夕べ》に描かれた風景は一部が画家の創作であったと考えることができそうである。

２－２　舩津家に関わる作品について

角井厚吉について調べてゆくなかで、舩津家との関わりから制作された作品がいくつかあることが分かったので、次にそうした作品について報告する。

まず取り上げるのは、舩津静作から依頼されて描いた「江北桜譜」と呼ばれる水彩画57枚である。こちらの制作経緯は、樋口惠一氏の『ワシントン桜のふるさと　荒川の五色桜「江北桜譜」初公開』などで詳細を知ることができる。舩津静作（1858-1929）は東京府下南足立郡沼田村（現在の東京都足立区）の舩津家の９代目当主で、1886（明治19）年に旧荒川の熊谷堤の補修工事で川の堤に桜を植えることになった際、その整備に携わった人物である[註23]。この時の整備によって78種類、3000本を超える桜が約６キロメートルにわたって植栽され[註24]、荒川の堤は桜の名所として有名となったが、舩津は以後もこの桜並木の維持や保護に尽力した。桜の形態調査や研究を重ね、品種の判定において右に出る者がいなかったといわれている[註25]。そして、舩津は荒川の堤に植樹した桜の写生画を、1913（大正２）年から７年をかけて角井に描かせ[註26]、それら57枚の水彩画は1921年に「江北桜譜」としてまとめられた[註27]。「江北桜譜」の写生画は『ワシントン桜のふるさと』の巻末に複製されており、角井の描いた桜を確認することができる。57枚は舩津の桜の鑑識眼の期待に添うかのような正確な描写の画となっている。

また、舩津は日米友好の印として、東京市が1912（明治45）年にアメリカのワシントンに桜の苗木を贈る際に桜の品種の選定に協力した[註28]。この時に贈られた桜が、ワシントンのポトマック河畔の有名な桜並木の源流となった。日本から贈られた桜の返礼に農学者・植物学者のウォルター・テニソン・スウィングルが、ハナミズキやカルミアを東京市に寄贈するため何度か来日した。スウィングルは1918（大正７）年には舩津のもとを訪れ角井の「江北桜譜」を実見していた。そして、ワシントンに贈られた11種の桜の写生画を舩津に所望し、舩津から「江北桜譜」と同種の水彩画11枚を1921（大正10）年に贈られた（**図３・４**）[註29]。11枚は現在、米国議会図書館に所蔵され、舩津がこれらを角井に描かせたと考えられている[註30]。注目できるのは、この水彩画の画面に「K. Tsunoi」とサインが書き込まれていることである。米国議会図書館に所蔵されている1923年の備忘録でスウィングルは、この水彩画を「舩津が、ある有能な画家に描かせた」と述べている[註31]。ここにある「ある有能な画家」とは、米国議会

図書館の写生画と「江北桜譜」の写生画の描写の類似から、角井厚吉と考えるのが妥当であろう。そうであるとすると、角井の苗字の読みが「つのい」であるとサインから知られるのである。

さらに、『足立史談』593号に掲載された伊澤隆男氏による「舩津静作翁に連なる人々」には、角井によって描かれた舩津静作の父・船戸徳助の肖像画が紹介されている[註32]。伊澤氏は静作の長男・船津輸助（1878-1940）の令孫にあたる方と結婚されており、今回、角井に関する貴重な情報をご提供くださった。伊澤氏からのご教示で徳助の肖像画の制作経緯も判明し、静作が1894（明治27）年に父・徳助を自宅に呼び、角井に肖像画を描かせたとのことである[註33]。今回、本作の調査には至らなかったが、『足立史談』に掲載された作品の画像を確認すると、本作は4分の3正面観で人物を捉えた伝統的な西洋式の肖像画で、老年の徳助は和服を身につけ、凄みのある表情で前を向いている。個性的な顔貌や、克明な皺の表現は写実という点で技量の高さを感じさせる。伊澤氏よると、徳助の肖像画だけでなく妻のちゃうの肖像画も残されているとのことである。

また伊澤氏は、静作の長男の輸助も角井と交流していたとご教示くださった。二人の交流は、足立区立郷土博物館所蔵の、角井が輸助に送った年賀状から理解できるとのことで、今回、この年賀状６枚を調査した。年賀状は新年の簡単な挨拶が書かれたものがほとんどであるが、年賀状からは角井が東京の本郷区に住んでいたことや、消印から少なくとも1931（昭和６）年まで交流があったことが確認された[註34]（**図８・９**）。このように角井は静作、輸助の親子二代と交流していたことになる。興味深いことに、輸助は早稲田大学の前身である東京専門学校で坪内逍遥や大西祝に学んでいた[註35]。早稲田大学ともゆかりのある輸助によって會津八一記念博物館の《早川　秋の夕べ》が、本学に寄贈された可能性も考えられるのではないだろうか。これについては引き続き調査を続けていく。

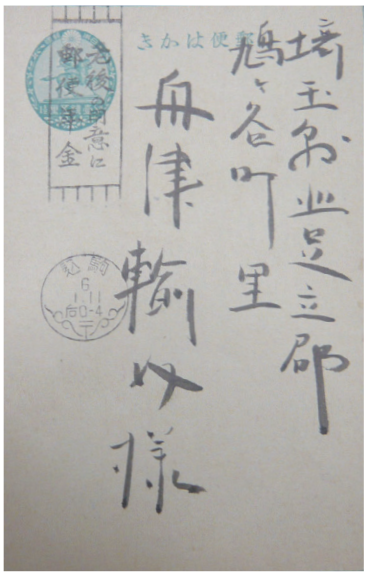

図８　角井厚吉が船津輸助に宛てた年賀状
（表）［昭和６年］　足立区立郷土博物館

図９　角井厚吉が船津輸助に宛てた年賀状
（裏）　足立区立郷土博物館

２－３　『小學新習畫帖：生徒用』について

先に触れた、小学校の美術教科書『小學新習畫帖：生徒用』は、表紙に「小山正太郎閲、角井厚吉著」と記されており、小山正太郎の監修のもと角井が手本となる線描画を描いている[註36]。本書は東京成美堂から1892（明治25）年に全部で８巻刊行されたようである。本書の刊行時期は、角井が不同舎に入塾して直後か数年後の年にあたる。稿者は今回、本書の１巻と東京学芸大学附属図書館が所蔵する３、７、８巻にあたるものを調査することがで

きた。それらを通覧すると、直線や正方形など簡単な図形からなる１巻からはじまり、巻が進むと生活道具や動植物、人物や風景などが手本として描かれている。簡単な描写から複雑な描写へと段階を追った構成となっており、本書が初学者向けの教科書であると納得できる。調査をした巻の内容を紹介すると、第１巻は主に図形（**図10**）、第３巻は傘や独楽など身の回りの道具（輪郭線のみの線描画）（**図11**）、第７巻は梨や提灯など（陰影のある線描画）（**図12**）、第８巻は動物や人物、風景などとなっている（**図13**）。

ただし、『小學新習畫帖：生徒用』の構成は、明治期の美術教科書について大規模な調査をされた金子一夫氏の論考に従うならば、角井の独創とはいいがたい。金子氏は明治期の図画教科書を、その性質から明治初期の模写のための教科書とその後に現われた教育的図画の教科書とに区別している[註37]。前者の、模写が目的となっている教科書は、標準的に数冊から10冊くらいでひとまとまりとなり、また各冊は10図から20図くらいの手本図を掲載している。恐らく角井の『小學新習畫帖：生徒用』も8冊は刊行されたと考えられ、また調査をした巻を見る限りでは各巻に20図くらいの手本図が載っている。金子氏の指摘する、模写を目的とした教科書の形態に本書も則っているということができる[註38]。

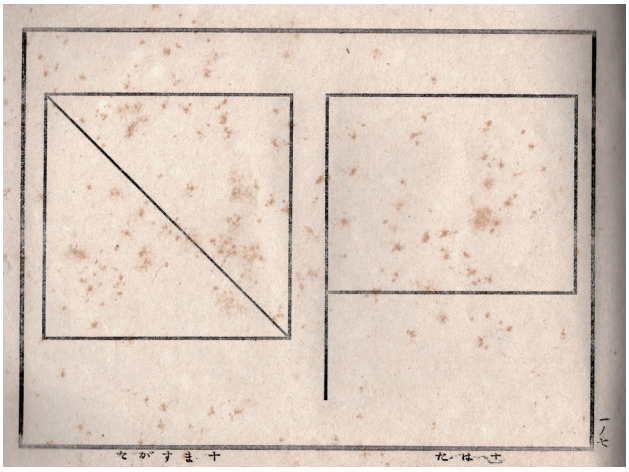

図10　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』［第1巻］

図11　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』［第３巻］　東京学芸大学附属図書館

図12　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』［第７巻］　東京学芸大学附属図書館

図13　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』［第８巻］　東京学芸大学附属図書館

おわりに

以上、本稿では当館所蔵の《早川　秋の夕べ》の作者、角井厚吉とその作品について、現在までの調査で判明したことを報告した。今回の調査では主に、角井の不同舎での活動や船津輸助との交流を明らかにすることができたが、画業については、これまでに知られていたふたつの桜譜と『小學新習畫帖:生徒用』に加え、新たに船戸徳助・ちゃう夫妻の肖像画の制作年代を確認することができた。また、当館所蔵の《早川　秋の夕べ》が実景に基づきつつ創作が加えられた風景画であることや、不同舎の写生旅行との関連が想定される作品であることを指摘した。本作は、角井が制作したと特定できる作品が少ないなか、画家の活動を明らかにする貴重な作例のひとつとして位置づけることができるであろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、伊澤隆男氏ならびに足立区立郷土博物館の加藤ゆずか氏、早稲田大学名誉教授 丹尾安典先生、早稲田大学図書館の山本さぎり氏には多大なるご助言やご協力を賜りました。末筆ながら、ここに深く感謝の意を表します。

註

⑴　1880（明治13）年に開校した京都府画学校は校名を幾度か変え、1901（明治34）年には京都市立美術工芸学校となっている。現在の京都市立芸術大学および京都市立銅駝美術工芸高等学校の前進である。『開校140周年企画展　京都府学校への道』京都市学校歴史博物館、2020年、44頁。

⑵　『京都市立美術工藝學校一覧』［京都市立美術工芸学校］、1908年、72頁。https://dl.ndl.go.jp/pid/812687/1/39（最終閲覧日2022年12月31日）

⑶　『開校140周年企画展　京都府学校への道』（註１前掲書）の45頁にある＜京都府画学校関連年表＞の明治13年８月27日の出来事欄には、「生徒募集、定員各宗20人とする。入学年齢14歳以上、但し下等小学全科卒業生は年齢に満たなくとも入学を許可」とある。

⑷　洋画家・田村宗立は、1881（明治14）年に京都府画学校西宗畫科の副教員となり、1889（明治22）年まで勤めた。京都市立芸術大学芸術資料館「京都市立芸術大学歴史関連資料　美術家略歴」http://libmuse.kcua.ac.jp/muse/bio/tamurasoryu.html　（最終閲覧日2022年12月31日）

⑸　松尾芳樹「京都市立美術工藝学校の教職員」『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第28号、2019年、2頁。

⑹　当時の状況は例えば、洋画家の吉田博（1876-1950）の回想から窺い知ることができる。吉田は1893（明治26）年より京都にて田村宗立に師事していたが、三宅克己に「京都などに居ては駄目だ。一つ東京に出て勉強したら何うか」（『小山正太郎先生』不同舎旧友会、1934年、187-188頁）と勧誘され、東京の不同舎へ入舎した。

⑺　金子一夫『近代日本美術教育の研究―明治時代―』中央公論美術出版社、1992年、635、637頁。

⑻　金子、註７前掲書、635頁。

⑼　「明治廿五年の三月である。某時代官立の美術藝校には、洋畫科が設けられてゐなかつたため、洋畫の研究者は設備不完全な畫塾に學ぶより外に方法がなかつたのである。其頃畫塾の中で不同舎は嶄然頭角を顯した一權威であつた。」（河合新藏「駒込團子坂時代の不同舎」、註６前掲書、168頁）。『小山正太郎先生』（註６前掲書）では、入学者の一覧で角井の名前を確認できる（217頁）ほか、集合写真（團子坂時代の先生及び塾生）で角井の姿を認めることができる。

⑽　角井厚吉『小學新習畫帖：生徒用』東京成美堂、1892年。

⑾　本稿の２－２で触れる通り船津津静作の長男・船津輸助の令孫の夫君である伊澤隆男氏が、「船戸徳助翁詳傳」（表紙に「松亭草稿」とあり）の一部を画像提供くださり、そこには船戸徳助とちゃうの肖像画制作の経緯が諭助の手書きによって記されている。

⑿　「僕が小山先生に贄を納れて不同舎に入舎したのは明治三十四五年の頃であつた。(中略) 當時角井さんが會計幹事であつたが五拾錢の月謝を納めて」（寺松國太郎「不同舎懐古」、註６前掲書、206頁）。

⑬ 「小生の不同舎入舎は明治二十五年十月上旬と思ひ候 (中略) 其時代の同學者は石川君は先生方に寄宿され居り、その他に角井、(中略) 等の諸君にて尚佐久間、下村、岡、中村、石川、角井、河合、沼邊等の諸君は先輩として敬意を拂ひ來り候。」「駒込團子坂時代の不同舎」、註６前掲書、170頁、齋藤百八の著述より。

⑭ 樋口惠一『ワシントン桜のふるさと　荒川の五色桜「江北桜譜」初公開』東京農業大学出版、2013年、21頁。

⑮ 樋口、註14前掲書、22頁。

⑯ 小杉放庵記念美術館のホームページの年譜より。 https://www.khmoan.jp/khmoan/biography.html（最終閲覧日2022年12月31日）

⑰ 註７参照。

⑱ 不同舎の卒業生が写生旅行について語った文献には次のようなものがある。註６前掲書、183、205頁 ; 小杉放庵「不同舎の人々（一）」『日本美術』第２巻第９号、1943年、37-38頁。

⑲ 『小田原市史　通史編　近現代』小田原市、2001年、203頁。これに先立ち新橋―横浜間は1872（明治5）年に開通している（同書、201-202頁）。

⑳ 註19前掲書、207頁。

㉑ 杉山博久『小田原の原風景　沿岸風物編―絵葉書にたどる思い出の浜辺―』伊勢治書店、1996年、39頁。

㉒ 神奈川県立生命の星・地球博物館の職員の方や箱根湯本駅近くの箱根町総合観光案内所の職員の方にご教示いただいた。

㉓ 樋口、註14前掲書、1-4、16頁 ; 伊澤隆男「舩津静作翁に連なる人々」『足立史談』第593号、2017年、2頁。

㉔ 樋口、註14前掲書、4頁。

㉕ 樋口惠一「「荒川の五色桜」異聞」『足立史談』第580号、2016年、2頁。

㉖ 57枚には、桜56種が水彩で和紙に描かれている。樋口、註14前掲書、21-23頁。

㉗ Nakahara, Mari; Blood, Katherine. *Cherry Blossoms: Sakura Collections from the Library of Congress*. Smithsonian Books, Washington, DC, 2020, p. 43.

㉘ 樋口、註14前掲書、39-40頁。桜の寄贈は1909（明治42）年に行われていたが、この１回目の寄贈で贈られた桜樹には害虫や細菌がいることが判明し、アメリアで焼却されてしまった（同書、36-37頁）。1912年が２回目の寄贈であった。

㉙ 樋口、註14前掲書、22、48頁。『ワシントン桜のふるさと』の巻末には、米国議会図書館所蔵の11点の写生画も複製されている。

㉚ Nakahara; Blood, op. cit., p. 43.

㉛ 米国議会図書館アジア部日本コレクション（001.02.00）。https://www.loc.gov/exhibits/cherry-blossoms/art-and-documentation.html（最終閲覧日2022年12月31日）

㉜ 伊澤、註23前掲書、1頁。

㉝ 註11参照。

㉞ これらの年賀状のうち、消印の年代が判読できたのは５枚であった。５枚の消印の年は４、５、６、８、10年となっており、ここからは大正と昭和の可能性が考えられるが、その中の１枚には郵便年金の印が押されている。郵便年金が創業されたのは、1926（大正15）年10月１日のため（日本郵政株式会社広報部社史編纂室『郵政150年史』日本郵政株式会社、2022年、86頁）、図８は昭和のものであると考えられる。

㉟ 船津輪助は、1895（明治28）年に東京専門学校文学科に入学、1898（明治31）年に卒業している。卒業後、中国人留学生のための教育機関であった大同高等学校（のちに東亜商業学校に改称）や、中国の北京東文学社で教えている。次の文献に詳しい人物紹介がある。小川博「解説　船津輪助のこと」『燕京佳信（船津輪助の北京通信）』（船津喜助編・小川博注）、1978年、235-274頁。

㊱ 角井、註10前掲書。

㊲ 金子、註７前掲書、第４章第３節、157-159頁。

㊳ 教科書に一定の形式があったのは、明治初期の教科書が先行する教科書に載っている図を引用することが多かったとの金子氏の指摘（註７前掲書、155、157頁）を参考にするならば、先行するものを手本とすることで自ずと一定の形式ができあがっていったからではないかと推察される。ちなみに金子氏は、明治初期の図画教科書が西洋の書籍に掲載されていた図を引用していたことも明らかにされている。角井の『小學新習畫帖：生徒用』についても、カッサーニュ（Armand Cassagne, 1823-1907）の *Le Dessin pour Tous* から３点の引用があったと指摘されている（註７前掲書、217頁）。